

総合型公募制学力入試／国語

2024年度の問題分析 総合型公募制学力入試

大問2題構成で、いずれも現代文(近代以降の文章)からの出題となっている。解答形式は選択式(マークシート方式)で、すべて4肢の中から正解1肢を選ぶ形式であった。試験時間は60分。

大問一は、宮田光雄『生きるということ』からの出題である。敵と味方に二分してしまうことは、政治の世界ではよく行われることだが、重要な問題を先送りにしたり、政治的失敗を隠蔽したりするために利用されることもあり、また、現実を誤って認識させ、偏見を助長してしまうという大きな問題を抱えていることを論じた文章である。

文字数は約2,300字。設問数は8つ、枝問も含めた解答数は16である。設問構成は、語句の意味を問うものが1問1答、漢字の問題が1問2答、語句の空所補充が2問6答、接続詞の空欄補充が1問4答、傍線部の意味を問うものが3問3答となっている。難易度は標準レベルであり、制限時間内で十分に解答できる問題である。ただ、正解のほかに、正解に近いがよく読むと間違っているような選択肢もあるので、慎重に吟味する必要がある。

大問二は、水原秋櫻子「私の俳句のつくり方」からの出題である。句作を始めた頃から誰もが大家として認めるようになるまでの著者の句作に対する姿勢や考え方を述べた文章で、句作の力は、基本をおろそかにせず、様々な人の作品を学び、同じく句作をする人との切磋琢磨のなかで伸びていくものであるとしている。

文字数は約4,000字。設問数は6、枝問を含めた解答数は18となっている。設問内容の内訳は、漢字の問題が1問2答、波線部の言葉の意味を選ぶ問題が1問3答、語句の空欄補充が2問11答、脱文補充が1問1答、内容合致問題が1問1答であった。全体として標準問題ではあるが、やや長い文章であり、設問にはやや紛らわしいものも散見される。空欄補充の問題も、前後をよく読むことは当然として、もう少し後ろの方まで(あるいは前にさかのぼって)読んでいく必要があるので注意が必要である。

学習アドバイス 総合型公募制学力入試

▶**丁寧に読むようにしよう** 本学では、大問二のように「軽く読める」エッセイもよく出題される。「軽く読める」ので、ザッと読むだけで答えを出そうとする受験生も多いが、そこに落とし穴もあるので注意が必要である。たとえば空欄補充の問題などは、通常は空欄の近くに答えのヒントがあるものだが、上の問題分析でも触れたように、本学ではそうとは限らず、大きく一つの段落のまとまりで読まないで答えが明確にならないものもある。ザッと読んでしまうと、「立ち止まって考える」ということを忘れがちになる。そこを注意してほしい。標準的な問題は他の受験生もある程度得点できるということだから、合格のためには極力ミスをなくすようにしておかなければならない。制限時間いっぱいまでよく見直すことが必要である。

▶**語彙力を身につけよう** 本学の現代文の特徴の一つに、語句や熟語、慣用句の出題が多いということがある。語句や熟語、慣用句に関する問題でとりこぼさないようにすれば、合格に大きく近づくことができる。時間がかかるうえに、面倒な作業ではあるが、語彙力を増強するように、普段からこまめに辞書を引いて言葉の意味を確認するように心がけてほしい。また、ただ覚えるだけでなく、語句や熟語、慣用句を集めた問題集を繰り返し解くことも必要である。知識はインプットも重要だが、アウトプットを通じて覚えた内容を確認することも大切である。普段の地道な練習が得点につながるものだと心得て、ぜひとも語彙力の向上には力を入れてほしい。

▶**読書習慣を身につけよう** 決して難しい文章が出題されるわけではないが、前述のように本学の国語の問題では丁寧な読みが必要になる。そういう問題への対処法は、やはり普段からの読書である。読書習慣を身につけることによって、丁寧さを保ちながら早く読むことも可能になる。さらに、読書を通じて得た語彙力は、あえて覚えようとしなくても身につくという利点もある。必ずしも難しい文章を読む必要はなく、大問二のようなエッセイでもよい。本学の過去問を調べれば出典がわかるので、過去に出題された文章を図書館などで探して読んでみるのもよいだろう。とにかく日頃から読書にいそむようしてもらいたい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

《敵―味方》という考え方は、政治の世界では、もっとも重要な枠組みになりがちです。政治の世界で行動する主体を《敵》と《味方》に分けることは、政治上の出来事を理解し解釈するうえで、明快な方向づけをあたえてくれるからです。いわば《黒と白》にぬり分ける二分法は、複雑な政治過程を **あ** して示すものです。それによって、あいまいさや不確かさを避けさせてくれるといえるでしょう。

そのことは、とくに国際政治のように、私たちが **1** に経験することのできない分野でよく見られます。ここでは、日常生活のなかの体験からえられた歪んだステレオタイプを、そのまま引きうつすことがよく行なわれます。《政治においては力だけがものを言う》《政治の世界では闘争の法則が必然的だ》などというのが、そうした国際政治を解釈する際のステレオタイプとされるのです。

《敵―味方》という考え方には、《敵》の陣営と《味方》の陣営とをひとまとめにしてとらえる傾向があります。誰が《敵》であり、誰が《味方》であるかがはつきりしていさえすれば、いちいち、細かく **い** するには及ばないのです。ちがった形をとり、ちがった顔をしていても、そこにいるのは、いつでも同じ《敵》だというわけです。

そのことをヒトラーは、『わが闘争』のなかで、**2** デマゴギー（うその宣伝）の方法として書きとめてい

ます。すでに「純粹に心理的な考慮からして」大衆にたいして「二つあるいはそれ以上の敵を提示しない」ことが必要だということです。そんなことをしたら、戦闘力を分散させることになるだろうから。**ア**、「大衆の注意力を分散させず、つねにある唯一の敵に集中させ」なければならぬ。「ばらばらの敵を、ただ一つのものと思わせるのは、偉大な指導者の天才による。**イ**、いろいろな敵がいると思うと、不安定な弱い性格のものは、すぐさま自分の正しさに疑いを感じはじめやすから」と。

敵は、いつでも一つ。いろいろな敵がいても、すべて同じ敵なのだ、というわけです。ヒトラーの場合には、あらゆる悪条件——第一次世界大戦でのドイツの敗北、戦後経済の混乱など——の背後には、いつでも同じ敵、すなわち、ユダヤ人があると言ったのです。共産主義やスターリンの背後にもユダヤ人があるし、資本主義やアメリカのローズヴェルト大統領の背後にもユダヤ人がある、といった具合だったのです。ヒトラー自身が、このデマゴギーにひそむ偏見の持ち主だったのです。

(略)

《敵―味方》というモデルは、大きく分けて二つの役割を果たしているように思います。

第一に、それは、《味方》の陣営を統合することに役立ちます。**ウ** の必要性をもっともらしくみせるも

のは、敵の存在です。それは、実在のものであれ、あるいは架空のものであれ、変わりありません。とくに《外敵》の脅威は、国民の関心を国内問題における対立から逸らせるものです。

西ドイツのアデナウアー首相は、権威主義的なリーダーとして知られていました。彼は、よくこの手法を用いたのでした。議会の論議で野党から彼の政策にとつて具合の悪い批判がでくると「事態は、いまほど深刻なときはない」といつて封殺するのをつねとした、といわれています。さし迫った外からの危険を前にすれば、国内政治上の紛争などは色があせてくる。それらの問題は、平和な時期がやってくるまで後回しにしなければならぬ、というわけです。こうしたやり方が現状のイ持に役立てられていることは、あきらかです。

《外敵》は、また国内政治のうえでの反対者を非難したり、ときにはそれを犯罪者に仕立てたりするためにも用いられます。**ウ**、外敵の脅威が迫っているときに、国内で分裂の種をまくものは、敵を利用する行為をしているのだ、そのようなものは《非国民》であり、敵の回し者だ、せいぜいのところ、余計なことにエネルギーを割かせる危険な愚か者だ、というわけです。

第二に、自分の政策が失敗した場合に、その責任を他になすりつけるうえで《敵》の存在は役立つわけです。そのほか、自分にたいする人びとの攻撃や憎しみを別の方向に誘導するときにも、《敵》は格好の標的となります。こうした心理的仕組みによって、個人でもまた全体としての社会でも、自己にふりかかってくる責任追及の重圧を軽くさせるのです。それが現状を安定化させる役割をもっていることは、あきらかです。

人間の深層にひそむ攻撃性については多くの議論があります。それが、生まれながらの本能によるものか、フラストレーション（挫折感）からくるものか、あるいはまた **3** 学習を通して植えつけられるものか、学

説は分かれています。**エ**、いずれにしても、現代社会には文化Ⅱ社会を脅かす攻撃性のエネルギーが大量に蓄えられているといわれています。このような場合、《敵》は、破壊的なエネルギーを発散させるのに格好の目標にさせられるのです。そのことによって、攻撃性が自国の体制に向かってくるのを避けることに用いられるわけです。

Ⅱ こうした《敵―味方》という考え方は、あきらかに現実を正しく認識することを妨げるものです。《敵》のイメージの最大の危険な点は、それが、まちがった認識をあたかも正しいものであるかのように思いこませることにあります。それは、けつして自分の誤りを変えようとはしなくさせるのです。《敵―味方》モデルの偏見は、あついで覆いのような効果をもつていて、現実についての正しい情報を受けつけさせないのです。それを突きぬけて入ってくる情報も、まさに《敵―味方》という見方から選択され、また解釈されます。つまり、自分の偏見を強める情報だけが選ばれます。それどころか、自分の偏見に反する正しい情報は、ねじまげて解釈されるのです。

(宮田光雄『生きるということ』より)

- 問一 傍線部①「ステレオタイプ」の意味にもっとも近い本文中の言葉はどれか。次の1～4から一つ選べ。
- 1 二分法
 - 2 方向づけ
 - 3 傾向
 - 4 偏見

解答欄(1)にマークすること

問二 傍線部②③のカタカナ部分に相当する漢字を含む熟語はどれか。次の1～4からそれぞれ一つ選べ。

- ② 1 フン失防止 2 異論フン出 3 フン骨碎身 4 孤軍フン闘
- ③ 1 イ心伝心 2 イ存体質 3 業務イ託 4 明治イ新

②は解答欄(2)にマークすること
③は解答欄(3)にマークすること

問三 空欄 1 に入るもつとも適切な語はどれか。次の1～4からそれぞれ一つ選べ。

- 1 社会的
- 2 間接的
- 3 政治的
- 4 直接的

1は解答欄(4)にマークすること
2は解答欄(5)にマークすること

3は解答欄(6)にマークすること

問四 空欄 ア 1 に入るもつとも適切な語はどれか。次の1～4からそれぞれ一つ選べ。

- 1 なぜなら
- 2 しかし
- 3 したがって
- 4 つまり

アは解答欄(7)にマークすること
イは解答欄(8)にマークすること
ウは解答欄(9)にマークすること
エは解答欄(10)にマークすること

問五 空欄 あ 1 に入るもつとも適切な語はどれか。次の各群の1～4からそれぞれ一つ選べ。

- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|
| あ | 1 象徴化 | 2 単純化 | 3 画一化 | 4 明確化 |
| い | 1 裁断 | 2 記載 | 3 研究 | 4 吟味 |
| う | 1 一致団結 | 2 不眠不休 | 3 唯一無二 | 4 呉越同舟 |

あは解答欄(11)にマークすること
いは解答欄(12)にマークすること
うは解答欄(13)にマークすること

問六 傍線部I「この手法」の説明としてもつとも適切なものはどれか。次の1～4から一つ選べ。

- 1 現在の脅威に目を向けさせることで、自分の過去の失政から目をそらさせようとする。
- 2 国内政治よりも国際政治の方が常に重要であると、自分の権威を元に野党を批判する。
- 3 国外にいる敵の存在を強調することで、自国における政治的な対立を回避させようとする。
- 4 外敵の脅威を煽るデマゴギーによって、自分の政治的な失敗に目を向けさせないようにする。

解答欄(14)にマークすること

問七 傍線部IIのように考えられる理由としてもつとも適切なものはどれか。次の1～4から一つ選べ。

- 1 《敵―味方》の図式が成立すると、今度はその見方が現実の認識に影響を及ぼしてしまうから。
- 2 《敵―味方》という考え方が、複雑な現実世界を正確に反映することはありえないから。
- 3 《敵―味方》の図式が成立すると、人はそれを自分の責任を他者に転嫁することに使うから。
- 4 《敵―味方》という考え方は、政治の世界の中でこそ真の有効性を発揮するものだから。

解答欄(15)にマークすること

問八 本文の内容と合致するものはどれか。次の1～4から一つ選べ。

- 1 《敵―味方》という考え方は、人間の深層にひそむ攻撃性が生み出す必然的なものである。
- 2 《敵―味方》という考え方が、政治の世界のみならず現状を安定させ持続させることに役立つ。
- 3 《敵―味方》という考え方を、うその宣伝の方法として巧妙に利用したのがヒトラーである。
- 4 《敵―味方》という考え方により、現代社会を脅かす破壊的なエネルギーを有効に利用できる。

解答欄(16)にマークすること

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私の作句は、人からすすめられて始まった。同じようなことで始めた人も多いであろう。しかし、いくら人にすすめられたところで、全く俳句に興味を持たぬ者が作句をはじめはるはずはない。俳句に関する若干の知識と興味とを持っているから、すすめに応じるのだと思う。

私は、東大で医学を学んでいた頃、「ホトトギス」を一年間ほど読んだことがある。また、『進むべき俳句の道』（高浜虚子著）を読んで、原石鼎、前田普羅、村上鬼城、渡辺水巴、飯田蛇笏などという「ホトトギス」代表作者の名と句とを記憶していた。それに、一高時代から東大時代にかけて、当時の歌壇の代表歌集は、ことごとく①セイ読していた。こんな基礎があつたので、作句のすすめにも応じたのである。

私に作句をすすめたのは、同じ研究室の助手をしていた緒方春桐という人である。一高時代・東大時代とつづいて一級上で、よく知っているだけにすすめ方も強引であつた。自宅でひらいている俳句会に、どうしても出て来いというのである。

行つてみると、やはり一級上の人達が五、六人、それに師範格として、「洪柿」社の野村喜舟さんが来ていた。

a 俳壇的には、「洪柿」系統の会に属したわけだが、当時「洪柿」がいかなる位置にあるのかということなど、全く知らなかつた。ただ春桐君の命ずるままに、毎月の句会に列席していた。あ

-9-

ことは、一面において危険ではあるが、俳句表現の、あの手この手を憶え込むにはこれほど都合のよいことはない。私は、自分の得点などは d して、専ら各派の表現の型を研究しようとした。この修業は、一口にいうと「脂汗をながす」修業だ。剣道でたたかれ抜いて業をおぼえてゆくのと同じことである。

今では、各派が皆純粹になつて、他派の手の練の人達などはやつて来ないから、好い作者達はすくすくと素直に伸びてはゆくけれど、表現の型を百種も心得ているという作者にはなりにくい。鍛え方がちがうと言つてもよいだろう。この苦しい修業の出来た私達は、なんといつても仕合せなことであつた。

「ホトトギス」の俳句は、昭和時代に入つてますます自然観察を深めて行つた。それがやがて微に入り e を穿ち、物の芽の形態を究めるような所まで進んだ。いささか行きすぎである。そういうことよりも、作者の感情をもっと大切にして、音調のしつかりした句を詠むべきだと私は考えた。い

私は、大正八年から十二年頃まで、窪田空穂先生に就て短歌の勉強をしたことがある。非常に有益だと思つたが、時間がなかつたため、俳句と両方勉強することは出来なかつた。それに友達はたいい俳句側だったので、私も俳句一方になつてしまつたが、空穂先生から教えられた短歌の音調ということは決して忘れなかつた。それをこの時代に思い出し、もう一度多くの歌集や歌論を読み直した上に、作者の感動を音調の上で現わす勉強をはじめた。それには一人になる方が都合がよいので、「ホトトギス」から離れ、前から同人になつていた「馬酔木」を自分の勉強場所にするにきめた。

-11-

作法書一冊、歳時記一冊、一万句集一冊——これだけを座右に備えた。現今ではよい作法書も、歳時記もいろいろ出版されていて便利だが、それを読まずに作句している人も多い。しかしそれはいけないと思う。作法書を読まずにはじめると、はじめから横道に逸れてしまうからである。

「洪柿」での修業は一年半ほどつづいた。そのうちに少しキウ屈になつて来た。「洪柿」には好い作者も多くいるし、好い句も多くあるが、全体が同じ趣味の下に統率されて、薙めきつつ細い道に入り込んでゆく傾向がある。それが私を b させるのだと思つた。私は、ひろい自然の中で呼吸する「ホトトギス」の俳句の方を、自分に適していると思つて、「洪柿」の友達の仲間から抜けることにした。一初心者動きなど、誰も相手にはしなかつた。

「ホトトギス」に投句をはじめてからは、出来るだけ自然に接して、四季の変化を見究める勉強をした。たいてい東大俳句会の人達が同行したので、これは実に楽しかつた。しかしどこまで行つても自然の美しさの c は知れず、これは未だにつづいてる仕事である。

もう一つ、よい勉強であつたと思うのは、大正時代の終りに、国民新聞社の月例俳句会に出席したことである。当時、虚子選の「国民俳句」は、俳壇で権威あるもので、その例会にはいつも七、八十名が集まつた。それが「ホトトギス」主流派の人達ばかりでなく、傍系の人達も混つていて、その中には実に手練の作者が多かつた。つまり全俳壇の処々の句会に顔を出し、どこでも高点を得ているという人達である。こういう人達の句に影響される

-10-

「馬酔木」では、まったく自由に、思うとおりの勉強をすることが出来たが、一方には若い人達を育てる仕事もあるし、医業関係にも多くの時間を費やさねばならなかつたから、苦勞は大きかつた。しかし、若い人達は順調に伸びて行つたので、その人達と俳句を研究してゆくのはおもしろかつた。う

連作を提唱したのもこの時代である。連作とは、一つの題材によつて、一句以上を連ね詠むことである。私達の実作も随分残つているが、この仕事は結局一句一句の f が稀薄になるという欠陥のあることがわかつた。前の句の意味をうけて後の句を詠むようにすると、それだけ前の句にもたれかかることになり、後の句だけでは完全な意味を成さぬようになる。更にまたもう一句つづけると、これが前二句にもたれかかるから、意味では無理で、とかく安易に作りがちになり、俳句の f が失われるという結論に達したから、その後は全く作らぬことにした。今でも往々にして作っている人を見かけるが、賛成しがたいと思う。

ただ、連作がのこした功績は一つある。それまでの作者は、大きな景色に向つても、割合に無欲で、せいぜい二句か三句詠めば足れりとしていた。それが今では五句、十句、多いときには二十句も三十句も独立した句を詠むような、息の長い作者が多くなつた。これは明らかに連作という試練が前にあつたからだと思つた。

このように、なにか新しい境をきり拓こうという勉強をしているうちに、戦争がはじまり、戦局が拡大すると

-12-

共に、雑誌は小さくなるし、俳句作者も減少してしまつたのであつた。

戦争は終つても俳句雑誌は復活せず、俳壇の人達の消息も **g** ていたし、自分の健康状態もよくなつた。そのうちに、人々の消息も次第にわかり、皆の努力で「馬酔木」も復活するし、句集や随筆集なども世に出るようになった。

そういうときに當つて、私は自分の俳句のことをよく考えてみた。それまで出した八冊の句集を読みかえしてみると、やはり『葛飾』が一番充実している。自然を思う存分に明るく詠みあげている。その後は次第に句が瘦せて来たようだ。私は、年齢を加えるに従つて、句は清澄になつてゆくのがよいと考えていたが、どうやらその清澄と羸瘦とをとりちがえていたと考えつた。どうせもう余命はいくばくもないのだから、こゝらで自分の持っているものを、あますところなく出し切つて、明るく美しい句を詠んでみようと思つた。 **え**

むかし、短歌を研究して、その音調を俳句にとり入れたいと考へていた頃の勉強心が再びよみがえつて来た。今度は何を勉強しようかと考へた末に、私はその対象として **X** を思いついた。 **X** からは必ず得るところがあるにちがいないと思つた。

その頃俳壇では、仏蘭西あたりの **Y** の勉強をしている人があり、その表現をとり入れたと思われる俳句も散見するようになっていた。しかし、 **Y** には比喩が多く使われていて、ともすれば意味不明という欠点に陥りやすい。俳句は言うまでもなく **Z** で、簡潔にして格調を重んずる性質を初めから負わされているのだから、比喩を重んずる外国の **Y** を研究するのは、方向がちがいのことと私は思つた。その点、

問一 傍線部①②のカタカナを漢字に直したとき、それと同じ漢字を使うものを、次の各群の1〜4（傍線部）からそれぞれ一つ選べ。

- ① 1 セイ細 2 セイ備 3 セイ硬 4 セイ援
- ② 1 キユウ水車 2 序破キユウ 3 困キユウ者 4 持キユウ走

①は解答欄(17)にマークすること
②は解答欄(18)にマークすること

問二 波線部A〜Cの意味として、もっとも適当なものを次の各群の1〜4からそれぞれ一つ選べ。

- A 1 いくらか 2 すべて 3 かなり 4 随分
- B 1 のこらず 2 いくらか 3 わずかに 4 だいぶ
- C 1 一度しかない 2 とりとめもない 3 わずかしかない 4 際限もない

Aは解答欄(19)にマークすること
Bは解答欄(20)にマークすること
Cは解答欄(21)にマークすること

X ならば、同じ **Z** で、性格を同じくする以上、学び得る点が多い。現に、芭蕉にしる、蕪村にしる、その影響を多分に受けているのだから、こゝらでまた新しく研究するのも、決して無意義ではないと考へた。しかし、その時代の私の先輩で、 **X** を諳記するのは、非常な努力を要することであつた。なにも諳記するまでのことはない、ただ読んでいけばよいではないかとも言われたが、音調をしつかり学ぶためには、やはり諳記して、五、六十首はいつでも誦し得るようにならなければいけないのではないか。

この仕事は実に大変であつた。中学や高等学校時代ならば、記憶力がつよいから、短いものを一日五首くらい諳記することも出来る。しかし、老齢の頭の働きというものは実に哀れなもので、私は五言絶句を一首覚えるだけに、完全に一日を費した。李白のような明朗な詩なら、まだよい方で、杜甫の詩など、一度おぼえてもすぐ忘れ、短いものに二日も三日もかかつた。まるで中学の受験時代に再会したようなものである。そんな苦しみが蓄積した結果、半年ほどたつて、とにかく長短併せて、六、七十首は諳誦出来るまでになつた。夕暮の浅川堤などを散歩しながら、それを口に出して誦してみるのには楽しかつた。そうしてそれが自然に作句のときに役立つようになった。言葉そのものが応用出来るのでなく、俳句の音調をつよめ得るようになって来たのである。現今ではまた頭の働きがおとろえて、諳誦し得るものは二十首ほどに減つてしまつたけれど、 **h** この時代は思い出してもたのしかつた。

(水原秋櫻子「私の俳句のつくり方」より)

※ 羸瘦：…疲れ瘦せること。衰え瘦せること。

問三 空欄 **a** **h** に入るもっとも適当な語句はどれか。次の各群の1〜4からそれぞれ一つ選べ。

- a 1 しかし 2 しかも 3 ただし 4 つまり
- b 1 清々しく すがすが 2 暑苦しく 3 狭苦しく 4 息苦しく
- c 1 端 2 底 3 天 4 先
- d 1 度外視 2 異端視 3 問題視 4 疑問視
- e 1 際 2 細 3 碎 4 才
- f 1 必然性 2 独立性 3 普遍性 4 虚構性
- g 1 離れ 2 薄れ 3 絶え 4 忘れ
- h 1 とにかく 2 いささか 3 おそらく 4 あたかも

a は解答欄(22)にマークすること
b は解答欄(23)にマークすること
c は解答欄(24)にマークすること
d は解答欄(25)にマークすること
e は解答欄(26)にマークすること
f は解答欄(27)にマークすること

g は解答欄(28)にマークすること
 h は解答欄(29)にマークすること

問四 空欄 X へ Z に入るもつとも適当な語句はどれか。次の各群の1～4からそれぞれ一つ選べ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| X | 1 | 唐詩 | 2 | 和歌 | 3 | 発句 | 4 | 連句 |
| Y | 1 | 抒情詩 | 2 | 叙事詩 | 3 | 新体詩 | 4 | 象徴詩 |
| Z | 1 | 古代の詩 | 2 | 近代の詩 | 3 | 日本の詩 | 4 | 東洋の詩 |
- X は解答欄(30)にマークすること
 Y は解答欄(31)にマークすること
 Z は解答欄(32)にマークすること

問五 問題文からは「不思議なことに、そう決心してから、気力が日に増し充実してゆくような気がした。」という一文が脱落している。この一文があった場所は あ へ え のどこか。次の1～4から一つ選べ。

1 あ 2 い 3 う 4 え

解答欄(33)にマークすること

問六 著者が俳句を作る上で留意したのはどのようなことであったか。本文の内容と一致しないものを、次の1～4から一つ選べ。

- 出来るだけ自然に接し四季の変化をよく見て、自然の姿を明るくのびのびと詠もうとした。
- 言葉の響きやリズムを大切にしたり音調の美しい句によって作者の感情や感動を表現しようとした。
- どの流派の句会でも高点を獲得するために表現の型を研究し高度な技巧を身につけた。
- 作法書や歳時記を手元に置いて俳句の基本を身につけ、句会に参加して様々な表現を学んだ。

解答欄(34)にマークすること

以上で問題は終わりです。

総合型公募制学力入試 解答例

国語 総合型公募制学力入試 I期

大問	解答番号	解答例	配点	大問	解答番号	解答例	配点
一	1	4	2	二	17	1	2
	2	1	2		18	3	2
	3	4	2		19	1	2
	4	4	3		20	1	2
	5	3	3		21	3	2
	6	1	3		22	4	3
	7	3	3		23	4	3
	8	1	3		24	2	3
	9	4	3		25	1	3
	10	2	3		26	2	3
	11	2	3		27	2	3
	12	4	3		28	3	3
	13	1	3		29	1	3
	14	3	5		30	1	3
	15	1	5		31	4	3
	16	3	4		32	4	3
				33	4	3	
				34	3	4	